

津
端
亨
編
纂

現代短歌分類辭典

新裝判
11卷

現代短歌分類辞典

新装版11巻

通巻169

平成一年三月二十九日発行	定價一五、〇〇〇円
著者発行 兼印刷者	津 端 亨
発行所	現代短歌分類辞典刊行所
	代表 津 端 亨
〒345	埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五
電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番	
振替 東京三一九三二一四	

(ISBN4-87706-168-1)

目

次

歌数 頁数

歌数 頁数

歌数 頁数

目 次

ごんげん〔権現〕	一	さいかい〔再会〕	五	さいくん〔細君〕	九
ごんげんやま〔権現山〕	一	さいかい〔再開〕	五	さいぐんび〔再軍備〕	九
ごんさん〔権さん〕	一	さいかい〔塞外〕	五	ざいけ〔在家〕	九
ごんじょう〔言上〕	一	さいがい〔災害〕	五	さいけいれい〔最敬礼〕	九
ごんどら〔ゴンドラ〕	一	ざいかい〔財界〕	五	さいけつ〔採決〕	九
さーかす〔サーカス〕	一	さいごう〔西郷〕	五	さいけつ〔採血〕	九
さーちらいと〔サーチライト・サチライト〕	二	さいかく〔才覚〕	六	さいげつ〔歳月〕	二〇
さあ〔さあ〕	二	さいかく〔西鶴〕	六	さいけつす〔採決す〕	二
さあさあ〔さあさあ〕	二	ざいがく〔在学〕	六	さいけん〔債券〕	二
さあらぬ〔然あらぬ〕	三	さいかち〔自英・自莢〕	六	さいけん〔債権〕	二
さあられ〔さあられ〕	三	さいかわ〔犀川〕	六	さいけん〔再建〕	二
さあを〔さ蒼〕	三	さいかん〔再刊〕	七	さいげん〔再現〕	二
さい〔差異〕	三	さいき〔再起〕	七	さいげん〔際限〕	二
さい〔骰子〕	三	さいぎ〔猜疑〕	七	さいけんしゃ〔債権者〕	二
さいあい〔最愛〕	三	さいきよう〔西京〕	七	さいご〔最期〕	二
さいあいびと〔最愛人〕	三	ざいきよう〔在京〕	七	さいご〔最後〕	三
さいあく〔最悪〕	三	ざいきよう〔在郷〕	七	さいこう〔再興〕	六
ざいあく〔罪悪〕	三	さいぎようあん〔西行庵〕	七	さいこう〔最高〕	六
ざいい〔在位〕	四	さいぎようき〔西行忌〕	八	さいこう〔採光〕	六
さいう〔細雨〕	四	さいきん〔最近〕	八	ざいごう〔在郷〕	六
さいうん〔彩雲〕	四	さいきん〔細菌〕	八	ざいごう〔罪業〕	六
さいえん〔才媛〕	四	さいく〔細工〕	八	さいこうほう〔最高峰〕	七
さいえん〔菜園〕	四	さいくする〔細工する〕	八	さいこく〔西国〕	七
さいか〔災禍〕	五	さいくつ〔採掘〕	九	さいごん〔サイゴン〕	七

さいこん〔再婚〕	七	さいしゅうとう〔濟州島〕	三	さいす〔座椅子〕	三
さいこん〔菜根〕	七	さいしゅつぱつ〔再出発〕	三	さいずる〔囀る〕	三
さいこんする〔再婚する〕	七	さいじよ〔妻女〕	三	さいせ〔在世〕	三
さいこんたん〔菜根譚〕	七	さいじよ〔才女〕	三	さいせい〔再生〕	三
さいさい〔歳々〕	七	ざいしよ〔在所〕	三	さいせい〔祭政〕	三
さいさい〔細々〕	七	さいしよ〔最初〕	三	ざいせい〔財政〕	三
さいざい〔騒々〕	九	さいしよ〔最勝〕	三	さいせいき〔最盛期〕	三
さいざいし〔騒々し〕	九	さいしよこうばいすう〔最小公倍数〕	三	さいせき〔採石〕	三
さいさん〔再三〕	九	さいしよ〔宰相〕	四	さいせきば〔採石場〕	三
さいさん〔財産〕	九	さいじよ〔最上〕	四	さいせき〔碎石〕	三
さいし〔妻子〕	二〇	さいじよそう〔最上層〕	四	さいせきじよう〔碎石場〕	三
さいし〔才子〕	二〇	さいじよ〔祭場〕	四	さいせきき〔碎石機〕	三
さいし〔祭司〕	二〇	さいじよ〔斎場〕	四	さいせきばた〔碎石畑〕	三
さいし〔祭祀〕	二〇	ざいしよ〔罪障〕	四	さいせき〔細石〕	三
さい〔些事〕	二〇	ざいじよ〔罪状〕	四	ざいせき〔在籍〕	三
さいじ〔妻児〕	三〇	さいしよげん〔最小限〕	四	さいせん〔再選〕	三
さいじ〔祭事〕	三〇	さいじよやそ〔西条八十〕	三	さいせん〔賽銭〕	三
さいじ〔細事・ほそじ〕	三〇	さいしよく〔彩色〕	三	さいぜんせん〔賽銭線〕	三
さいしく〔彩色〕	三〇	さいしよく〔才色〕	三	さいぜん〔最前線〕	三
さいじき〔歳時記〕	三〇	さいしよく〔菜色〕	三	さいせんざむ〔賽銭作務〕	三
さいじつ〔祭日〕	三〇	さいしよく〔菜食〕	三	さいぜん〔最善〕	三
ざいしつ〔材質〕	三	ざいしよく〔在職〕	三	さいせんばこ〔賽銭箱〕	三
ざいしーて〔際して〕	三	ざいしよくしゆぎ〔菜食主義〕	三	さいそうち〔採草地〕	三
ざいしゆ〔採取〕	三	ざいしんぶ〔最深部〕	三	さいそく〔催促〕	三
ざいしゆ〔祭主〕	三	ざいしん〔細心〕	三	さいだー〔サイダー〕	三
ざいしゆ〔最終〕	三	ざいじん〔才人〕	三	さいーた〔咲いた〕	三
ざいしゆ〔採集〕	三	ざいしんしきひこうき〔最新式飛行機〕	三	さいたい〔妻帯〕	三
ざいじゆう〔在住〕	三	さいず〔サイズ〕	三		
ざいしゆうかい〔最終回〕	三				

さいだい〔最大〕	三	さいとう〔西塔〕	罍	さいばんしょ〔裁判所〕	罍
さいだいじ〔最大事〕	三	さいとさき〔西戸崎〕	罍	さいばんとう〔サイパン島〕	罍
さいだいげん〔最大限〕	元	さいどく〔再読〕	罍	さいひつ〔細筆〕	罍
さいだいじ〔西大寺〕	罍	さいなまれ〔苛まれ〕	罍	さいひょうせん〔碎氷船〕	罍
さいたく〔採択〕	罍	さいなみ〔苛み〕	罍	さいひょう〔碎氷〕	罍
さいとう〔西塔・さいとう〕	罍	さいなむ〔苛む〕	罍	さいひん〔采蘋〕	罍
さいたま〔埼玉〕	罍	さいなまれゐる〔苛まれゐる〕	罍	さいふ〔財布〕	罍
さいたん〔最短〕	罍	さいなめ〔苛め〕	罍	さいぶ〔細部〕	罍
さいたん〔採炭〕	罍	さいなん〔災難〕	罍	さいぶれす〔サイプレス〕	罍
さいだん〔祭壇〕	罍	さいなんじけん〔済南事件〕	罍	さいぶんか〔細分化〕	罍
さいだん〔裁断〕	罍	ざいにん〔罪人〕	罍	さいぼ〔歳暮〕	罍
さいだんばさみ〔裁断鋏〕	罍	さいのう〔才能〕	罍		
さいだんだい〔裁断台〕	罍	さいのかわら〔賽の河原〕	罍		
さいだんする〔裁断する〕	罍	さいのめ〔賽の目〕	罍		
さいち〔才智〕	罍	さいは〔砕破〕	罍		
さいちゆう〔最中〕	罍	さいばいしゃ〔栽培者〕	罍		
さいちよう〔細長〕	罍	さいばいち〔栽培地、栽培場〕	罍		
さいづち〔木槌〕	罍	さいばいよう〔栽培用〕	罍		
さいて〔咲いて〕	罍	さいはい〔采配〕	罍		
さいてい〔最低〕	罍	さいはいらん〔采配蘭〕	罍		
さいていげん〔最低限〕	罍	さいはつ〔再発〕	罍		
さいてい〔裁定〕	罍	さいはつしーたり〔再発したり〕	罍		
さいてる〔咲いてる〕	罍	ざいばつ〔財閥〕	罍		
さいてん〔採点〕	罍	さいはて〔さいはて〕	罍		
さいてん〔祭典〕	罍	さいわい〔幸い〕	罍		
さいでん〔斎田〕	罍	さいばん〔歳晩〕	罍		
さいど〔再度〕	罍	さいばん〔裁判〕	罍		
さいど〔サイド〕	罍	さいばんかん〔裁判官〕	罍		
さいとう〔彩灯〕	罍	さいばんちょう〔裁判長〕	罍		

さいみんがい〔細民街〕	𠄎	さえぎられ〔遮ぎられ〕	一四	さお〔竿・棹〕	一四	一八
さいみんようざつしよ〔催眠用雑書〕	𠄎	さえぎり〔遮り〕	一四	ざおう〔蔵王〕	一四	一八
さいむ〔債務〕	𠄎	さえぎりーて〔遮りて〕	一四	ざおうどう〔蔵王堂〕	一四	一八
さいむしや〔債務者〕	𠄎	さえぎりぬ〔遮りぬ〕	一四	ざおうね〔蔵王嶺〕	一四	一八
さいもく〔細目〕	𠄎	さえぎる〔遮る〕	一四	さおさす〔棹さす〕	一四	一八
さいもく〔材木〕	𠄎	さえくる〔沓え来る〕	一四	さおしか〔小牡鹿〕	一四	一八
さいもくがし〔材木河岸〕	𠄎	さえざえし〔沓えざえし〕	一四	さおとめ〔早乙女〕	一四	一八
さいもくおきば〔材木置場〕	𠄎	さえさえて〔沓えさえて〕	一四	さおどる〔さ躍る〕	一四	一八
さいもくしょう〔材木商〕	𠄎	さえざえと〔沓々と〕	一四	さおぶね〔小舟〕	一五	一八
さいもくぶね〔材木舟〕	𠄎	さえざえ〔沓えざえ〕	一五	さか〔逆〕	一五	一八
さいもくいちば〔材木市場〕	𠄎	さえーし〔沓えし〕	一五	さか〔坂〕	一五	一八
さいもくじま〔材木島〕	𠄎	さえしづまり〔沓えしづまり〕	一五	さが〔佐賀〕	一五	一八
さいもくぼり〔材木堀〕	𠄎	さえずり〔囀り〕	一五	さが〔嵯峨〕	一五	一八
さいもん〔祭文〕	𠄎	さえずる〔囀る〕	一五	さか〔境・界〕	一五	一八
さいやく〔災厄〕	𠄎	さえずれーり〔囀れーり四〕	一五	さかいき〔酒息〕	一五	一八
さいよう〔採用〕	𠄎	さえーたり〔沓えたり〕	一五	さかいぎ〔境木・界木〕	一五	一八
さいらい〔再来〕	𠄎	さえーたる〔沓えたる〕	一五	さかいす〔境す〕	一五	一八
さいりゆう〔細流〕	𠄎	さえつ〔査閲〕	一五	さかいする〔境する〕	一五	一八
さいりよう〔最良〕	𠄎	さえーて	一五	さかいで〔坂出〕	一五	一八
ざいりよく〔財力〕	𠄎	さえとおる〔沓えとおる・沓えとほる〕	一五	さかいでしせい〔坂出市制〕	一五	一八
ざいる〔ザイル〕	𠄎	さえーにーつつ〔沓えにつつ〕	一五	さかいめ〔境目〕	一五	一八
さいれい〔祭礼〕	𠄎	さえまさり〔沓えまさり〕	一五	さかうえ〔坂上〕	一五	一八
さいれん〔サイレン〕	𠄎	さえまさる〔沓えまさる〕	一五	さかえ〔栄〕	一五	一八
さうんど〔サウンド〕	𠄎	さえも	一五	さかえ〔寒河江〕	一五	一八
さえ〔さえ〕	一五	さえゆく〔沓えゆく〕	一五	さがえきでぐち〔佐賀駅出口〕	一五	一八
さえ〔沓え〕	一五	さえる〔沓える〕	一五	さかえーたり〔栄えーたり〕	一五	一八
さえかへりーつつ〔沓え返りつつ〕	一五	さえわたり〔沓え渡り・沓えわたり〕	一五	さかえーたる〔栄えーたる〕	一五	一八
さえくる〔沓え来る〕	一五	さえわたる〔沓え渡る・沓えわたる〕	一五			
さえきーて〔沓えきて〕	一五	さえん〔茶園〕	一五			

さかえーて〔栄えーて〕	三六	さがしめる	三五	さがしもとむる〔探〕	二四〇
さかえーむ〔栄えーむ〕	三九	さがしをり〔探しをり〕	三五	さがしぶりする	二四〇
さかえゆく〔栄えゆく〕	三九			さかしもの〔探し物〕	二四〇
さかえる〔栄る〕	三九	さかしき〔賢しき〕	三五	さかしやまみち	二四〇
さかおけ〔酒桶〕	三九			さかしら〔賢しら〕	二四〇
さかおとし〔逆落し〕	三九			さかしらに〔賢しらに〕	二四〇
さかがみ〔逆髪〕	三〇			〔険〕 さかしらびと〔賢人〕	二四〇
さかがめ〔酒壺〕	三〇	さかしく〔賢しく〕	三〇	さかす〔咲かす〕	二四〇
さかき〔櫛〕	三〇			さかーず〔咲かす〕	二四一
さかきーのーき〔櫛の木〕	三二			さかす〔探す〕	二四二
さかきば〔櫛葉〕	三二	さかしくに	三二	さかすき〔杯、盃〕	二四六
さかぐせ〔酒癖〕	三二	さかしげーに〔賢しげーに〕	三二	さかすーも	二四六
さかぐら〔酒倉〕	三二	さかしさ〔険しさ〕	三二	さかすーや〔咲〕	二四六
さかけ〔酒気・しゆき〕	三二	さかしーし〔咲かし〕	三二	さかすーや〔咲〕	二四六
さかけ〔逆毛〕	三二	さかした〔坂下〕	三二	さかすーや	二四六
さかごと〔逆事〕	三二	さかしたまち〔坂下町〕	三二	さかせ〔咲かせ〕	二四六
さかさ〔逆さ〕	三二	さかしたもん〔坂下門〕	三二	さかーせーざらーめーや	二四五
さがさがし〔険々し〕	三二	さがしーて	三二	さかーせーたる〔咲かせたる〕	二四五
さかさがわ〔逆川〕	三二	さかしま	三二	さかせーて	二四五
さかさごと〔逆事〕	三二			さかーせーぬ〔咲かせぬ〕	二四五
さかさーな〔咲かさな〕	三二	さがしーぬ〔探しぬ〕	三二	〔捜〕 さかだち〔逆立〕	二四五
さがさわ〔嵯峨沢〕	三二			さかだちーて〔倒立ちて〕	二五六
さかさま〔逆様〕	三二			さかだつた〔逆立つた〕	二五六
さかし〔賢し〕	三二	さかしまーに〔逆しましに〕	三二	さかたび〔逆旅〕	二五六
さかし〔険し・峻し〕	三二	さかしまの	三二	さかたをみな〔酒田をみな〕	二五六
さがしあぐね〔探しあぐね〕	三四	さかしーみ	三二	さかだつ〔逆立つ〕〔自タ五〔四〕〕	二五六
さかしお〔逆潮〕	三五	さかーしむ〔咲かしむ〕	三二	さかたやま〔坂田山〕	二五六
さがしるーし	三五	さかしめーて〔咲かしめて〕	三二	さかたる〔酒樽〕	二五六
さがしるーて	三五	さがしもとめーて	三二	さかち〔逆路〕	二五六
				さかぢ〔嵯峨路〕	二五六

さかづくり〔酒造り〕	二五	さかびと〔酒人〕	二五	さかもとあたり〔坂本あたり〕	二五
さかつば〔酒壺〕	二五	さかふ	二五	さかもとーのーさと〔坂本の里〕	二五
さかて〔逆手〕	二五	さかぶき	二五	さかもり〔酒盛り〕	二五
さかーで〔咲かで〕	二五	さかぶとりしーて〔酒ぶとりして〕	二五	さかや〔酒屋〕	二五
さかな〔魚〕〔肴〕	二五	さかぶね〔酒槽〕〔酒舟〕	二五	さかやき〔月代〕	二五
さかない〔咲かない〕	二五	さかえーば	二五	さがやま〔嵯峨山〕	二五
さかないち〔魚市〕	二五	さかほがい〔酒ほがひ〕	二五	さかゆ〔さ粥〕	二五
さかないちば〔魚市場〕	二五	さかまい〔酒米〕	二五	さかゆ〔栄ゆ〕〔栄える〕	二五
さかなか〔坂中〕	二五	さかまきおちーて〔さかまき落ちて〕	二五	さかゆく	二五
さかながれしーつつ	二五	さかまきおろす〔逆巻きおろす〕	二五	さかゆる〔栄ゆる〕	二五
さかーなく〔咲かなく〕	二五	さかまききたる	二五	さからい〔逆らい〕	二五
さがなし	二五	さかまきながる〔さかまき流る〕	二五	さからいすむ〔逆らい進む〕	二五
さかなづつみ〔魚包み〕	二五	さかまく〔逆巻く〕	二五	さからいーて〔逆らいーて〕	二五
さかなつり〔魚釣り〕	二五	さかまけーる〔さか巻ける〕	二五	さからいとびーつ〔逆らひとびつ〕	二五
さかなびき〔逆なびき〕	二五	さかまち〔坂町〕	二五	さからう〔逆らう〕〔逆らふ〕〔さからふ〕	二五
さかなみ〔逆浪〕	二五	さがみ〔相模〕	二五	さからはーず	二五
さかなや〔魚屋〕	二五	さがみおんな〔相模女〕	二五	さからいゆきーつ	二五
さかーぬ〔咲かぬ〕	二五	さがみかわ〔相模川〕	二五	さかり〔さかり・離〕	二五
ざかね〔座金〕	二五	さがみがはら〔相模原〕	二五	さがり〔下り〕	二五
さかの〔嵯峨野〕	二五	さがみこ〔相模湖〕	二五	さかり〔盛り〕	二五
さかーのーうえ〔坂上〕	二五	さがみじ〔相模路〕	二五	さかり〔さかり・離〕	二五
さかのぼり〔朔のぼり〕	二五	さがみの〔相模野〕	二五	さかりきーて〔離りきて〕	二五
さかのぼる〔栄登る〕	二五	さがみーのーうみ〔相模の海〕	二五	さかりこーし〔離り来ーし〕	二五
さかのぼる〔朔のぼる〕	二五	さがみわん〔相模湾〕	二五	さかりーし〔離りし〕	二五
さがーのーまち〔嵯峨の町〕	二五	さかみち〔坂道〕	二五	さがりーし〔下りし〕	二五
さかーば〔咲かーば〕	二五	さかみづき〔酒みづき〕	二五	さがりーし	二五
さかば〔酒場〕	二五	さかみづき〔酒みづき〕	二五	さかりすみーし〔離り住みし〕	二五
さかはーのーまち〔酒匂の町〕	二五	さかーむ〔咲かむ〕	二五	さかりすみーて〔離り住みて〕	二五
さかばた〔酒旗〕	二五	さかーむ〔裂かむ〕	二五	さかりすむ〔離り住む〕	二五

さがりたり〔盛りたり〕	二九三	さき〔咲き〕	三〇〇	さきおとつい	三九四
さかりたる〔離りたる〕	二九三	さき〔咲き〕	三〇〇	さきおもり〔咲きおもり〕〔咲き重り〕	三九四
さがりて〔離りて〕	二九三	さき〔先〕〔前〕	三〇〇	さきおもり〔咲き重る〕	三九四
さがりて〔下りて〕	二九三	さき〔驚〕	三〇〇	さきかえり〔咲返〕	三九四
さかりどき〔盛り時〕	二九四	さきあかりたり〔咲き明りたり〕	三〇〇	さきかかりたる	三九四
さかりぬ〔離りぬ〕	二九四	さきあかる〔咲きあかる〕	三〇〇	さきがく〔先駆く〕	三九四
さかりば〔盛り場〕	二九四	さきあふる	三〇〇	さきかけ〔先駆け〕	三九四
さがりまつ〔下松〕	二九四	さきあふれつつ〔咲き〕	三〇〇	さきかけ〔先駆〕〔先駆け〕	三九四
さかりゆく〔離りゆく〕	二九四	さきあへぬ〔咲き敢えぬ〕	三〇〇	さきがけいるか〔さきがけ海豚〕	三九四
さがりいる〔下りいる〕	二九四	さきいけ〔驚いけ〕〔驚池〕	三〇〇	さきがけたまふ	三九四
さがる〔下がる〕	二九四	さきいそぐ〔咲き急ぐ〕〔咲急〕	三〇〇	さきがけて〔先駆〕	三九四
さかる〔盛る〕	二九七	さきいづ・さきいず〔咲き出づ〕〔咲き出ず〕	三〇〇	さきかこむ〔咲き囲む〕	三九四
さかるる〔裂かるる〕	二九六	さきいずる・さきいずる〔咲き出ずる〕〔咲出〕	三〇〇	さきかさなれり	三九五
さかれて〔割かれて〕	二九六	さきいで〔咲きいで〕〔咲出で〕	三〇〇	さきかさなれり〔咲き重なれる〕	三九五
さがれり	二九六	さきいでし〔咲き出でし〕	三〇〇	さきがた〔先方〕	三九五
さがれり〔下れる〕	二九六	さきいでて〔咲きいでて〕	三〇〇	さき―がたき〔咲き難き〕	三九五
さがれり〔盛れる〕	二九六	さきいで―にけり〔咲出〕	三〇〇	さきかたむきて	三九五
さがれん〔サガレン〕	二九六	さきいでぬ	三〇〇	さきかはり〔咲きはかり〕	三九五
さかわがわ〔酒匂川〕	二九六	さきいで―む	三〇〇	さきかはりつつ	三九五
さかん〔左官〕	二九六	さきう〔砂丘〕	三〇〇	さきかはる〔咲きはる〕	三九五
さがん〔左岸〕	二九六	さきうちたい〔砂丘地帯〕	三〇〇	さきかへり〔咲き返り〕	三九五
さがん〔左眼〕	二九六	さきうづみ・さきうづみ〔咲き埋づみ〕〔咲埋〕	三〇〇	さきが〔先借り〕	三九五
さがん〔砂岩〕	二九六	さきうつむ〔咲埋〕	三〇〇	さききそう・さききそふ〔咲き競ふ〕	三九五
さかんなり	二九六	さきうつりつつ〔さきうつる〕	三〇〇	さききつて〔咲き切つて〕	三九五
さかんなる〔盛んなる〕	二九六	さきうるほへり〔咲きうるまへり〕	三〇〇	さきてる〔咲き照る〕	三九五
さかんなれ〔盛んなれ〕	二九六	さきえぬ〔咲きえぬ〕	三〇〇	さききはまりし―て	三九五
さかんに〔盛んに〕	二九六	さきおう〔前追う〕	三〇〇	さききはまれり	三九五
さき〔岬〕	三〇〇	さきおくれ〔咲き遅れ〕	三〇〇	さききりし〔咲き切りし〕	三九五
	三〇〇	さきおくれ―たる	三〇〇	さききりて	三九五

さききる〔咲き切る〕	三九六	さきしだれーたり	四〇三	さきたけーて〔咲き闌けて〕	四〇六
さききわまりーて	三九六	さきしづむ さきしずむ〔咲きしづむ〕	四〇三	さきだし〔咲き出し〕	四〇六
さききわまれーり	三九六	さきしづもれーり〔咲き〕	四〇三	さきだす〔咲き出す〕	四〇七
さきくに〔狭国〕	三九六	さきしづもれーる	四〇三	さきたたれーて〔先立たれーて〕	四〇七
さきさぶ〔咲進〕	三九六	さきしなひ〔咲きしない〕	四〇四	さきだち〔先立ち〕	四〇七
さきしだる〔咲垂〕	三九六	さきしぶりーつつ	四〇四	さきだち〔先発ち〕	四〇七
さかぢ〔坂道〕	三九六	さきしらけーつつ	四〇四	さきだちて〔先立〕	四〇七
さきくさの	三九七	さきすぎーむ〔咲過〕	四〇四	さきだちて〔先立ちて〕	四〇八
さきくさ〔驚草〕	三九七	さきすぎーつつ	四〇四	さきたつ〔咲き立つ〕	四〇八
さきくづれーたり〔咲きくづれたり〕	三九七	さきすめる〔咲きすめる〕	四〇四	さきたつ さきだつ〔先立つ〕	四〇八
さきくげ〔驚舌〕	三九七	さきせまり〔咲きせまり〕	四〇四	さきたて〔咲きたて〕	四〇九
さきこぼす〔咲きこぼす〕	三九七	さきそう〔さきそう〕〔驚草〕	四〇四	さきだてーて さきたてーて〔先立てて〕	四〇九
さきこぼれ〔咲きこぼれ〕	三九七	さきそはーむ	四〇四	さきだてーり	四〇九
さきこぼれーたり〔咲きこぼれたり〕	三九七	さきそふ〔咲き添〕	四〇四	さきだてーる〔先立てる〕	四〇九
さきこぼれーたる	三九八	さきそふーならーむ	四〇四	さきたに〔前給〕	四一〇
さきこぼれーる〔咲きこぼれる〕	三九八	さきーぞーみだるる	四〇四	さきたもつ〔咲き保つ〕	四一〇
さきころ〔先頃〕	三九八	さきそむ〔咲き初む〕	四〇四	さきたらひ さきたらい〔咲き足らひ〕〔咲き足らい〕	四一〇
さきさかつーた	三九八	さきそむーる〔咲き初むる〕	四〇五	さきたらふ〔咲き足らふ〕	四一〇
さきさかり〔咲き盛り〕	三九八	さきそめーし	四〇五	さきーたり〔咲きたり〕	四一〇
さきさかりーたり	三九八	さきそめーて	四〇五	さきーたる〔咲きたる〕	四一二
さきさかりーたる	三九八	さきそめーつつ〔咲き初めつつ〕	四〇五	咲きーたるーも	四一六
さきさかりーつつ	三九八	さきそめーぬ	四〇五	さきたるーる〔咲き垂るる〕	四一六
さきさかる〔咲き盛る〕	三九八	さきそめーにーけり	四〇五	さきたれーし〔咲垂れし〕	四一六
さきざき〔先々〕	三九八	さきそめーぬ	四〇五	さきたれーて〔咲き垂れし〕	四一六
さきさだまりーて	四〇〇	さきそめーむ〔咲き初め〕	四〇六	さきたわみ〔咲きたわみ〕〔咲き擁み〕	四一六
さきーし〔咲きーし〕	四〇〇	さきそめーい〔咲き揃い〕	四〇六	さきたわむ〔咲き擁む〕	四一六
さきーし〔裂きーし〕	四〇三	さきそろひーたり さきそろいーたり	四〇六	さきちり〔咲き散り〕	四一六
さきしだり〔咲きしだり〕	四〇三	さきそろひーたる さきそろいーたる	四〇六	さきちる〔咲き散る〕	四一七
さきしだりーたる	四〇三	さきそろふ〔咲揃ふ〕	四〇六	さきつひ〔先つ日〕	四一七

さきつつ〔咲きつつ〕	四二七	さきてりーし	四三八	さきのぼり〔咲きのぼり〕	四四五
さきつかれーたり	四二八	さきてりつつく	四二八	さきのぼりゆく	四四五
さきつかれをり	四二八	さきてる〔咲き照る〕	四二八	さきのぼる	四四五
さきつがーん	四二八	さきども〔先供〕	四二八	さきーのーみなと〔崎の港〕	四四五
さきつおや〔先つ祖〕	四二八	さきどる〔先取る〕	四二八	さきーのーよ〔前の世〕	四四五
さきづき〔咲き継ぎ〕	四二八	さきなえーし	四二八	さきはな〔岬鼻〕	四四五
さきづきーし〔咲き継ぎし〕	四二八	さきーながら さきーながら	四二八	さきはい〔幸い〕	四四五
さきづきーて〔咲継〕	四二八	さきなびく〔咲きなびく〕〔咲き靡く〕	四二八	さきはゆーる	四四五
さきづきをり〔咲きづきをり〕	四二八	さきーなーむ	四二八	さきひらきーたり	四四五
さきつぐ〔咲きつぐ〕	四二九	さきなむ〔苛〕	四二九	さきひろがれーり	四四六
さきつぐーべくーも〔咲きつぐーべくーも〕	四三〇	さきなやむ〔咲きなやむ〕	四二九	さきひろこれーる	四四六
さきつげる〔咲きつげる〕	四三〇	さきーにーたり〔咲きにたり〕	四二九	さきふけーて	四四六
さきーつつ〔咲きつつ〕	四三二	さきには〔前庭〕	四二九	さきふるへーつつ	四四六
さきつづき〔咲続き〕	四三二	さきにほひーたる さきにおいーたる〔咲き匂いたる〕	四二九	さきぶれ〔先触れ〕	四四六
さきつづきーたり	四三二	さきには〔前庭〕	四二九	さきふれなみ	四四六
さきつづきーたる	四三三	さきにほふ さきにおう〔咲匂〕	四三〇	さきほうけーつつ	四四六
さきつづく〔咲きつづく〕	四三三	さきなづむ	四三〇	さきほけーて〔咲きほけて〕	四四六
さきつづくーらし	四三三	さきにおえーる	四四一	さきぼそ〔先細〕	四四六
さきつづけーたり	四三三	さきーにーけり	四四一	さきまさるーらむ	四四六
さきつづけーたる	四三三	さきーぬ	四四二	さきまじる〔咲交〕	四四六
さきつづる	四三三	さきね〔き杵〕	四四二	さきまじるーらむ	四四六
さきつどいーたる	四三三	さきーのーおや〔先の祖〕	四四二	さきみだれーたり	四四六
さきつとし〔先つ年〕	四三三	さきのこり〔咲き残り〕	四四二	さきみだれーたる	四四六
さきーて〔咲きて〕	四三三	さきのこりーたる〔咲残りたる〕	四四二	さきみだれちる	四四六
さきーて〔割きて〕	四三三	さきのこりある〔咲きのこりある〕	四四二	さきみちそよぐ	四四六
さきーて〔裂きて〕	四三三	さきーのーみかど〔先帝〕	四四二	さきみちーて	四四六
さきで〔咲き出〕	四三三	さきのこる〔咲残〕	四四二	さきみつ〔咲き満つ〕	四四七
さきでーたる	四三三	さきのこれーる	四四二	さきみつーる	四四七
さきてらふ〔咲きてらふ〕	四三八	さきーのーだいじん〔前大臣〕	四四二	さきみてーり	四四七

さきみてーる	四七	さきをりーて	四九
さきみなぎりーて	四七	さく〔咲く〕	四九
さきむらがりーて	四七	さくぞ〔咲くぞ〕	四九
さきむる〔咲群〕	四七	さく〔咲く〕	四九
さきむれーて	四七	さく〔柵〕	四九
さきもり〔防人〕	四七		
さきやせーて	四七		
さきやま〔前山〕	四七		
さきやま〔岬山〕	四七		
さきやまーず〔咲きやまず〕	四八		
さきゆらぎゐる	四八		
さきゆらぐ〔咲きゆらぐ〕	四八		
さきよこれーたる	四八		
さぎり〔さ霧〕	四八		
さぎりだち	四九		
さきわけ	四九		
さきゐーし	四九		
さきゐーたり	四九		
さきゐーたる	四九		
さきゐーつ	四九		
さきゐーて	四九		
さきゐーむ	四九		
さきゐる〔咲きゐる〕	四九		
さきをとつゐ	四九		
さきをはるーべき〔咲きをはるーべき〕	四九		
さきをへーし	四九		
さきをへーず	四九		
さきをり〔咲きをり〕	四九		
さきんず〔先んず〕	四九		
		合計 二二、〇三二首	

ごんげん【名詞】〔権現〕

前巻に続く

目にまばゆく朝日をあびた権現。すぐ前の停車場を小さくする。⑤
詣で来る箱根権現箱王小さきすがたのあはれにぞ見ゆ⑤
山の上の権現の社ふしをがみ日は暮るるかも春の草山③
酔ひぎめの水をこくりとのむうまさ、権現山の鐘の音のよさ①
われ仰ぐ今朝も大杉権現の威のある風の離れぬ棺②

ごんげんやま【名詞】〔権現山〕

権現山暮れて下り来し暗がりにわが足ちかくほとばしる水①
酔ひぎめの水をこくりとのむうまさ、権現山の鐘の音のよさ①

ごんさん【名詞】〔権さん〕

夕かげにみつばを採めば権さんもなさんも三つばの茂り教へゆく⑧

ごんじょう【名詞】〔言上〕

目上の人に述べること。

言上げて何をか云はむ荒雄らが血しぶきあげて地に伏す今を③
御墓の骨にもすがり言上したき吾にこらへし思ひ残れり⑤
「飛行機は僕好きです」と勇士の前に言上したり聞きのよろしき②③

ごんどう【名詞】〔ゴンドラ〕

イタリアのベネチア（ベニス）名物の平底で幅のせまい船首と船尾の持ち上がった形の船。②気球、ロープウェイ、飛行船などの吊りかご。客室。

石崖をひたひたぬらす水の襲なつかしみ見つゴンドラに乗る
石切りし山岸の荒れまざまざとゴンドラの窓に迫るひととき②
岩山の岩擦るほどに天をゆくゴンドラにして羽化登仙す⑥
親鳥のはぐくむに似て自動車を包蔵したるゴンドラの塔③
風壓に曝され宙吊りのゴンドラが谿わたりゆくを熱く見守る③
雲あかきゆふまぐれどきゴンドラに乗りつつ来旅はさびしも④
ゴンドラに來たりてここは雲のうへ雪の嶺嶺空に競りあふ⑤

矢代東村	窪田空穂	島木赤彦	福田夕咲	與謝野晶子	加藤洵綾	福田夕咲	土屋文明	斎藤史	今井邦子	下村海南	茅野雅子	田谷鋭	松岡貞総	村野次郎	鐸静枝	斎藤茂吉	相良義重
------	------	------	------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	-----	------	------	-----	------	------

ゴンドラに乗りてヴェネチアめぐり居る吾と妻とは争ひもなし⑤
ゴンドラのかこのふるまひゆるやかに揺れてはすすむ朝霧の中
ゴンドラの水路をめぐりて物を売る青年の顔朝の日が輝く
ゴンドラは人樂します仕掛にて谷間の宙を滑りて行けり③
視界ひろく登りゆくゴンドラ溪に沿ひ溪は深雪の下よりたぎつ⑤
大小の渠に出入るゴンドラに古の代の音を聞かむか
水の中に透りて蒼き日のひかりじつと見ながらゴンドラを待つ
屋台ゴンドラにちらと見し顔の白かりき夜闇にしるく水の揺れつつ②
山のしじまを若葉がにほふゴンドラに乗り来て白馬に友と吾が立つ⑥
夜をこめて唄女の声水に高しゴンドラの灯が幾つもゆらぎ②

さーかす【名詞】〔サーカス〕

動物と人間の曲芸を主とした、多くは旅回りの見世物、又その一座。曲馬団。

サーカス出て席の埃はらひ居り外の空地のさむき夕日に（多摩二）
サーカスの屋根のテントを吹き飛ばし昨夜の嵐に花も散りたり（朝日短歌二）

サーカスを見つつ無邪気に笑ひ居る人の横顔われはたのしむ①
さ夜更けて露に濡れるサーカスの天幕の皺たるみ揺れつつ④
アメリカのサーカスの来る宣伝が緊張をもつ紙面に明るし②（朱夏）
青き服ひたと身につくサーカスの女の肢体眼にたかく居り（多摩二）
サーカスに人たかる衝のあたりよりもろの音おこりくるらし③
サーカスの大きな自動車に往きあへり村にやうやく近づくらしき②
サーカスの檻に寝そべるライオンの足裏さみし陽に乾きたる④（現代短歌大系）
サーカスの檻のライオンの口髯が擦り切れてゐて欠伸しにけり④
サーカスの小屋あとかたもなくなりて解けゆく霜がけむりをあぐる①
サーカスの小屋壊されし広庭に蚤取る猿の掌黒し④
サーカスの猿はいくつになりぬらむ竹馬にのりじてん車に乗る⑩

斎藤茂吉	高松宮宣仁親王	原三郎	村野次郎	植松寿樹	斎藤茂吉	茅野雅子	朝吹磯子	朝吹磯子	佐藤信春	高木哀花	立花馨	若林牧春	真鍋美恵子	佐藤信春	結城哀草果	朝吹磯子	若林牧春	若林牧春	安立スハル	若林牧春	土岐善麿
------	---------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	------

サーカスの去りたるあとの河堤むなしきさまに夏陽霧らへり⑤
高安国世
サーカスのテントのなかへあふれくる午後二時過ぎの露店の煙⑩
土岐善磨
サーカスの天幕大きくたるみるて朝よりの雨溢れつつあり④
若林牧春
サーカスを見ずやといはれ見にくればみな楽しげにかかる世界もあり

⑬ 自動車よけて雨着を着する子の顔に秋の雨散りサーカスの終演①
野田孝之
妻子つれ女中までつれ汽車に乗りハーゲンベックのサーカス見に行く
竹添履信

① ながながとサーカスの象が吹き鳴らすラッパのひびき何かげざむし①
中村正爾
はねてはや夜更けしづけきサーカスの天幕が重くたるみ揺れつつ
若林牧春
われにまつ未来もなしとひとり言ふサーカスなどを見てかへりきて⑤
生方たつゑ

さーちらいと【名詞】「サーチライト・サチライト」

探照灯。投光器の一つ。大形で精度の高い反射鏡をもち、強く細い光束を出すもの。

② 暗夜の中野の空をかざつて事あるらしく探照灯が揺曳する⑬
金子薫園
暗夜の中野の空をかざつて事あるらしく探照灯が揺曳する⑬
金子薫園
幾條かのサーチライトが闇空に交錯しつつ高射砲鳴る⑬
石井淡水
今は夜半の一時頃なりかそかにかそかに爆音きこえサーチライト光る
三苫京子

① 観艦式終へて泊れる軍艦のサーチライトの光ぞこれは①
浅野豊子

雲多き夜空をうごく幾すぎの探照灯は中断たれつつ⑤
半田良平
雲の上の月恋ひをれば二筋の探照灯は空に交錯す
安成二郎
軍艦の探照灯のおよびつつわが投網打つ浜の明るさ⑦
木本義雄

警備艇の探照灯に守られて夜ふけ島より入坑せりと⑦
高安国世

サーチライトにありありとかぶちぎれ雲の何か稚き動きなりけり
山崎隆子

サーチライトの氷に明る一筋に白きセーターの子が照らし出されぬ
紺谷志一

③ 多磨③
横山峽星

サーチライトの明き光に照り出づる青き木立は生ける如しも

サーチライトの明き光に足もとの小草の茎もつばらかに見ゆ②
横山峽星

③ 岬山の崖の真上にひとつ在る探照灯は白し星のしづけさ⑥
中村正爾
空たかく探照灯は入り交ひて銀翼見えつ火は降りに降る②
岡崎義恵

探照灯ま闇の空をつらぬきて青き幾すぎ乱れ相合ふ⑩
窪田空穂

探照灯に海ひとところ照り明り十字光芒に打ち向ふもの
久慈正造

探照灯のするどき光消えしとき星ふるばかりきらめき出でたり①
大場寅郎

探照灯の光箭交す夜空なり生死①
吉野秀雄

探照灯遠く條曳く夏の夜の暗き片空を啼き渡る鵲①
隅田葉吉

宙を薙ぐサアチライトのたまたまは触れてすぎゆけり谿の上の雲に
三田喜蔵

③ 月の夜の空にきびしくさし交はす探照灯は夜すがらならし①
大場寅郎

逃ぐるにぐると喚声をあげてわれ等見つサーチライトの鋭き光芒①
三苫京子

港より数里の夜空を貫きてここにおよべりサーチライトの光芒①
浅野豊子

眼にあふぐ探照灯ひくし寺裏の簷の上に青く曳く光
古城珠江

宵の程街空ひくく行く雲はサーチライトに照らし出されぬ④
半田良平

さあ【感動詞】「さあ」

① 人を語ったり促したりする時に発する語② 決意や事実を改めて述べる時に用いる語

③ 判断に迷ったり返答に困ったりした時、ためらいの気持で発する語

さあ踊る音頭をとるといふ子供すなはちしたり赤き頬かむり②
米田雄郎

「さあこれから畑へ行かう」とどこどかとみんな裸足で土間に
矢代東村

おり立つ③

さあさあ【感動詞】「さあさあ」

人を強く誘い促す時に発する語。「さあさあ、早く」。

さあさあと声かけて妻は雨はれし庭の鮮土に雛鶏放つ①
金子信三郎

晴天の朝の首途だ、日の丸の旗の下で、さあみんな乾盃だ⑩
前田夕暮

さあらぬ【連語】〔然あらぬ〕

①そうではない。そうならぬ。②なにげない。なにくわぬ。

あな寒とかこてば目もてうなづけど盛りの人はさあらぬらしき①⑤
黒髪は少女のごとく匂へどもさあらぬ君が眸のおとろめ①
この丘のいかりはわれも知りたれどさあらぬさまに草穂つみに行く
銭あればさあらぬ物を振舞ひて喜びとせる君なりけるを④
なぐさめてダビデを語る友あれどさあらぬ方へ耳のかたむく③
不意に來し停電をさあらぬものとなほやさしく語りある人ごゑ聞ゆ②
わがいほのかきねの水に山鳥つばさあらぬ日はなかりけり①
昭憲皇太后

さあられ【動詞】〔さあられ〕

慈愛ふかき父母なりしさあらわが甘ゆる癖の一生をぬけず①
千人の力もさあれ中の一人君のところに我さへ泣かゆ（支那事変戦後）
泉 百合子

さあを【名詞】〔さ蒼〕

「さ」は接頭語。

明け方のさ蒼の海を流れ来るかなしみ見つつ渚に立ちぬ①
輝かしく積高奥嶺にゐる雲のそがひの空のいやさ蒼なる
はたたがみ天もどろに鳴り響きさ蒼の山を越えにけるかも（現代短歌大系）
中村 三郎
近藤 元
高木 一夫

冷え冷えと海のさ蒼にうちひたり生命青さめ煙草くゆらす②
近藤 元

さい【名詞】〔差異〕

他の物と異なる点。他のものとの違い。

ある角度にま向へる時すべきもなき個性の差異のこの友にあり②
描きなぐりの荒き油絵アリゾナの沙漠に思ふ民族の差異②
実感となしたる世界書にして知りしと差異の大き思はむ③
日本製品と差異はあらざれ蕪細工パリの色彩に魅せられぬたり⑤
六十度ばかり角度の差異もちて今の社会にわれは余生す①
真鍋 美恵子
中河 幹子
村野 次郎
朝吹 磯子
桐田 路村

さい【名詞】〔骰子〕

①すぐろく。ばくちなどに用いる道具。さいころ。角、象牙、木材などで作った小型の立方体でその六面に1から6までの点を記したものを。

思ひきつて遂に骰子をばなげうつたれ見むとして何ぞ心をののく（銀の巻）

ごろころと二個の骰子の転げゆくころよさをばよしと思ひぬ（水莊記）
はしけやし二人の兄が雙六にまじり顔する小さき手の骰子②
吉井 勇
熊谷 武雄

さいあい【名詞】〔最愛〕

非常にかわいく思うこと。たいそう愛すること。

サツフオよわが最愛のたをやめよともに死なむとちかひける子よ（水莊記）
吉井 勇

その姉が少年に宛てし書信にて我的最愛の弟といくつも記す

さいあいびと【名詞】〔最愛人〕

人の来て最愛人と身を云ふにわれ憎からぬ世を知り初めぬ（夢の巻）

さいあく【名詞・形動詞】〔最悪〕

最も悪いこと。又そのさま。

あり得べき最悪の態つと浮び見つめんとするに消え去りにけり②②

子のわれの最悪の日を思ひうかべ論したまひき世にありし父②④

山川に心やしない生涯の最悪のいまをあやまたざらむ①（現代短歌全集・現代短歌大系）

さいあく【名詞】〔罪悪〕

悪事。罪。とが。

うもれたるわが罪悪のかたかげを慕ひて青くよるやこの浪⑤

硝子張りの中に人居り罪悪はあますなく世界の耳に伝はる④

紅葉など見てあるくことさへ許されないその美しさについていふこと
などは罪悪だろう⑤

罪悪の街愛慾の街におびえながら望郷のしづかさか涙になる

罪悪を犯せしごとくおもひけり卵一つをのみしせつなに

人類のあらそひは却初來の事ながら阿片戦争ほどの罪悪は無し①①

佐佐木 信綱
吉井 勇
熊谷 武雄
鈴木 英夫
與謝野 晶子
窪田 空穂
窪田 空穂
中河 幹子
若山 牧水
山下 陸奥
矢代 東村
土岐 善麿
細井 魚袋
川田 順

培ふを罪惡として蒙古人毛物とともにいまに移ろふ④
盗み掠め騙り搾りし一世紀の罪惡のをはりと火焰降りつつ⑪
のろひてものろひきれる罪惡ぞ憎しまれ極刑が待つ⑨
無知なるは罪惡なりといふことのかほどにしろき世のあるべしや④

さいい【名詞】〔在位〕

（帝王が位についていること）又その期間。御代。治世。

旗の波ちようちん行列国あげて陛下在位六十年を祝う

さいう【名詞】〔細雨〕

細かな雨。霧雨。こさめ。

青葉かげ昼寝しをれば散りかかる細雨はかくこの夏も逝く②
無花果がじくしてゐはしないかと細雨にぬれながらいちじくの木に歩
み寄る

海上よりむせび泣きこし夜の細雨岩角に倚り眼を閉づるかな①

そこに石があり石をつつむ空間がありそこに降りやまぬ細雨霽々⑤

つゆに入りし細雨けぶらふ雑林の青葉がなかに青きひとむら①

細雨に樹々しめりたる匂あり柴戸を閉ててところ狭き庭①

ボストンの古き舗道に細雨降りほとほと吾れは遠く来にけり①

山峡の空のいづくかきらめきし細雨しづくする窓ちかき山は①

わが父が希ひやまざりし細雨かもせう條として地にしみ入る④

さいうん【名詞】〔彩雲〕

①朝日や夕日などに映えて美しい雲。②高層の雲の縁辺部がその縁に平行にいろどら
れてみえる現象。色は緑とピンク色が主。雲を作る微小水滴で太陽光が回折する時に
みられる現象。

彩雲かあるは御神のおん裾かをろがむぬかにまばゆかりにし①

彩雲は月のほとりにいざよひてしばらくにして消たるあはれさ⑭霜

髪ながきその子御堂の廊に持ちしまどひと見ずやちぎれ彩雲（小鳥）

彩雲は月のほとりにいざよひてしばらくにして消たるあはれさ⑭

咲きのこる唾べのさくらひと花の散る闇を消えしゆふ彩雲⑩

吉植 庄 亮
川 田 順
前 川 佐美雄
渋谷 すみ子
津 端 亨

葉 山 耕三郎
花 岡 謙 二

森 園 天 涙
小 宮 良太郎
村 田 利 明
小 宮 良太郎
辻 本 敬 三
村 田 利 明
館 山 一 子

相 馬 御 風
斎 藤 茂 吉
與 謝 野 晶 子
斎 藤 茂 吉
安 江 不 空

高山ゆひき山の伊穂里振りさけて見る間に消えし原野彩雲⑭
並みよろふいかしかしこき軍艦をしみそなはすがに彩雲なびく⑩
南国のかかる夕の彩雲に向ひて君とあるよしもがな②⑨
富士が嶺に遊ぶ仙人彩雲の裳裾の紐を今とくらしも①

さいえん【名詞】〔才媛〕

頭が良くて教養のある女性。才女。学問、才能がすぐれた婦人。

早熟の才媛病みて盗汗になやみけん日の跡の目に沁む③

さいえん【名詞】〔菜園〕

野菜畑。

朝づく日ひかり幽けく菜園の甘藍の列に霜ふれりけり②

朝な朝なおく霜深し菜園におろしおくれし冬菜そだたず

朝ゆふ妻がいそしむ菜園の胡瓜は一つ花つけにけり②

あたたかき霧立つ夕べ菜園の杭を打たむとたづさはり出づ②

青きずるき茜きずるきと植ゑ並めて影のすずしや菜園の牆①

幾年を菜園として耕やしし庭に今日しも花の種まく（朝日短歌）

老妻がほかはかまはぬ菜園に今日馬鈴薯の芽が二つ出づ③

黄に枯れし蔓たぐりつつ整理せし吾が菜園に今日の月かげ③

菜園あり椎木立ある小路にて夕べは蝶の飛びある多し①

菜園の土手の梅の木けさ見れば実のはだかぞと姉の歎かす①

菜園の、剽軽な有色人種、なすび／夕立をおし気もなくもてあそぶな
すび／③

訪ね来し伴の友は上着ぬぎ菜園のうへにうち屈みをり⑩

敵機こぬそのひまひまに菜園を耕すといふラウルの兵は④

徹夜勤務終へて帰り来菜園に妻は大根さげて笑みをり（毎日歌壇）

東京の神田生まれの妻のまへ家庭菜園の話には触れず②

トマトに今日手を立てし菜園はくれてすがしき月夜となりぬ①

安 江 不 空
安 江 不 空
與 謝 野 晶 子
藤 原 檀 堂

川 浪 磐 根

金 子 不 泣

雉 本 す ま

広 野 三 郎

近 藤 芳 美

中 村 正 爾

沼 田 成 比 古

広 野 三 郎

吉 田 正 俊

磯 幾 造

川 浪 磐 根

清 水 信

窪 田 空 穂

米 田 雄 郎

南 出 吉 春

上 田 英 夫

藤 原 東 川